

ゼミ選考時の成績の指標と卒業時のゼミ成績の関連性の分析

01007324 近畿大学 大村 雄史 OHMURA Takeshi

1. はじめに

ゼミ選考時の各学生の履修科目の平均点と、その学生が2年後に卒業する時のゼミの成績の関連については既に報告[1]をしたが、履修科目の平均点はゼミの成績にある程度関連があるという事が分かった。ここではそれ以外の成績の指標との関連について述べる。

この研究の目的は、ゼミの学生が卒業するときのゼミの成績と、ゼミの選考時の成績の間には何らかの関連性があるように思われたため、それらの検証を行うことである。本研究では選考時の成績の指標として、各学生の履修科目の平均点以外の指標との関連について分析した。その結果、各学生の卒業時のゼミの成績と関連がある指標を明らかにすることができた。

2. 分析の対象

筆者の研究「ゼミ選考時の学業成績とゼミでの成績の関連性」[1]の場合と同様に、筆者のゼミの学生の過去のデータを用いることにする。

3. 選考時に得られるデータの特徴

ゼミ選考時に参照できるデータは面接のデータと成績のデータであるが、本研究では成績データのみに着目する。成績データは、応募学生の科目毎の優、良、可、不可、不受という結果だけが得られる。ゼミの選考は1次・2次・3次とあり、ゼミ選考時の成績で学生を評価するときには、1次・2次と3次の学生では、ベースとなる期間が違い履修科目数が異なるので、取得単位数や優・良・可の科目数は選考の指標としては使えない。また、3次選考で、編入の学生である場合は、前の学校の履修科目の体系が当学部と違うため、単位の認定のみとなり具体的な成績は分からないことになる。

4. 選考時に考慮の対象とできる変数

この様な場合に使うことが出来る変数は、いわゆる履修科目の平均点か、比率の数値である。平均点についての分析は既に述べた[1]。本研究では、主に比率の数値について分析する。

比率の数値を使う場合の注意点は、比率は絶対値を反映していないという事である。例えば履修科目数が12科目で優が6科目の学生と、履修科目数が4科目で優が3科目の学生がいたとき、優の比率のみに注目すれば後者の学生の方が良いとなるが、履修科目数を見れば一概にはそうは言えないことが分かる。本研究の前提とする状況では、1次・2次と3次の選考では、履修科目数の違いはせいぜい2倍であり、大幅に絶対値が違ってもいけないので、注意しつつ比率の数値を使うことにする。まず、優、良、可、不可、不受それぞれの履修科目数に対する比率が考えられる。更にそれらの一次式を考えることができる。つまり、「優、良、可、不可、不受それぞれの履修科目数に対する比率」、更に「優、良、可、不可、不受の比率の一次式」について分析する。

4.1 履修科目の平均点

具体的には各学生の履修科目の平均点は下記の式で求める。

$$\left(\text{優の科目数} \times 80 + \text{良の科目数} \times 70 + \text{可の科目数} \times 60 \right) / \text{履修科目数} \quad \dots (1)$$

この変数についての分析結果は既に述べた。[1]

4.2 優・良・可・不可・不受の比率

これらの比率は、それぞれの科目数を履修科目数で割った値を使う。例えば、優の履修科目数に対する比率は

$$\text{優の科目数} / \text{履修科目数} \quad \dots (2)$$

となる。

4.3 選考時の成績のデータの一時式

ゼミ選考時の成績のデータの一次式は、(優+良)、(優+良+可)、

(可+不可+不受)、(不可+不受)のそれぞれの科目数を履修科目数で割った値となる。例えば(優+良)の履修科目数に対する比率は
(優+良)の科目数 / 履修科目数 . . . (3)
となる。

5. 卒業時のゼミの成績の変数

ゼミの成績の付け方は、筆者は、基本的には出席点と卒業論文の成績で決定している。従って、現実にはほとんどあり得ないが、仮に卒論が良いものであっても、出席が悪ければゼミの成績は良い点は付かない。

5.1 ゼミの出席に関する変数

年度が違えば授業日数が異なるため、単なる出席、遅刻、欠席の日数は使えない。授業日数の違いを補正するため、それぞれの日数を各年のゼミの授業日数で割った比率を用いる。ゼミの3年次、4年次の出席点は各年次の出席率、遅刻率にある係数を掛けて和を取る。

5.2 卒業論文の成績

卒業論文の成績は「テーマの良さ」「研究方法」「文章の書き方」「プレゼンテーションのわかりやすさ」等を数値化し、それらの一次式で算出する。

5.3 ゼミの成績

ゼミの成績は、3年次の出席点、4年次の出席点、卒業論文の成績、それ以外の加点要因の点数の一次式である。

6. ゼミ選考時の各学生の成績の指標とゼミにおける成績の変数との関連

相関係数行列より、ゼミ選考時の成績の指標でゼミにおける成績の変数に関係があると思われるのが、既に[1]で取り上げた「平均点」と今回取り上げる「優の%」、「(優+良)の%」、「(優+良+可)の%」である。その中でも「優の%」がゼミにおける成績の変数に最も関係があることが分かった。

7. 結論

(1) ゼミ選考時の成績の指標として「平均点」「優の%」「良の%」「可の%」「不可の%」「不受の%」「(優+良)の%」「(優+良+可)の%」「(可+不可+不受)の%」「(不可+不受)の%」を取り上げ、入ゼミ後のゼミの成績と関連性を検討した。その結果、ゼミ選考時の各学生の「優の%」が、入ゼミ後のゼミの成績と大きく関連することがデータで検証された。

(2) ゼミ選考時の各学生の「優の%」は、特に4年次の欠席率との相関が大きく出ている(負の相関)。この理由として、就職という心理的圧力がかかった状態でも、ゼミ選考時の「優の%」の高い学生ほどそれに耐えて、出来るだけゼミを休まないようにしていることを意味していると思われる。また、成績の良い学生ほど就職に対する研究を良く行っている可能性が高く、そのことが就職が早く決まることに寄与していると考えられ、結果としてゼミを欠席する必要がなくなる事も考えられる。

つまり「優の%」はもちろん、「ゼミ選考時の履修科目の平均点」も「優」の比率が大きく効いている指標であり、その指標がよいということは、物事を良く考え理解していることその他に、心理的な忍耐力の強さに関連する指標の一つでもあると考えてもよいだろう。これは企業が求める必要条件の一つでもある。

(3) 4年次の遅刻率がゼミ選考時の各学生の「優の%」と無相関となったが、これは企業のセミナーや入社試験が、丁度ゼミの時間に重なっている事が影響していると考えられる。

参考文献

- [1] 大村雄史, 「ゼミ選考時の学業成績とゼミでの成績の関連性」,
OR学会平成12年度秋季研究発表会アブストラクト